

では**第一テモテの 3 章**をお開き下さい。これは牧会書簡でありますので、特に牧師に向けて書かれている内容となっております。熟練した老練の牧師パウロから、若いエペソの教会の牧師であるテモテに宛てた手紙が、今私たちが学んでいるテモテへの手紙であります。で、今日見る **3 章**は、その牧師の資質若しくは資格についてパウロがリストアップしているところを見ることとなります。で、これは勿論牧師に限定せずに、教会のリーダー又は家庭のリーダー、職場のリーダー、男性・女性問わずに当てはめることの出来る非常に実践的な内容となっております。一読して一目瞭然ですけれども、そこに書かれている資質・資格・クオリティーというのは、ほとんどキャラクターについてであります。その人の性質についてであります。まあ、人間性と言っても良いかもしれません。性格とか性質、キャラクターです。知識だとか、学歴だとか、技術・技能というものはそれほど問われておりません。英語で”being”（ビーイング）という言葉があります。そして、もう一つ”doing”（ドゥーイング）という言葉があります。”being”というのはその人の存在。”doing”というのはその人の為す事です。何を為したか、というよりも、どんな人間であるべきなのか、それが**第一テモテの 3 章**の牧師の資質というところに問われています。何を為したか、ではなくて、どんな人間になったのかということをも最期に私たちは主から問われます。”doing”ではなくて、”being”です。特にそれは神様との関係、人間との関係に現れていくところであり、その一つ一つをパウロはリストアップし、私たちに神と人との関係がどうなのかということをも問うものであります。

そしてもう一つ皆さんに押さえて頂きたいことは、リーダーのように教会もなるということです。リーダーのように家庭もなっていく。リーダーのように職場もなっていくということです。このような概念、このような発想というものはパウロのオリジナルのものではなく、独自のものではなく、既に旧約聖書の中にも見られるものであります。出エジプト記 18:19~23 (19 さあ、私の言うことを聞いてください。私はあなたに助言をしましょう。どうか神があなたとともにおられるように。あなたは民に代わって神の前において、事件を神のところに持って行きなさい。20 あなたは彼らにおきてとおしえとを与えて、彼らの歩むべき道と、なすべきわざを彼らに知らせなさい。21 あなたはまた、民全体の中から、神を恐れる、力のある人々、不正の利を憎む誠実な人々を見つけ出し、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として、民の上に立てなければなりません。22 いつもは彼らが民をさばくのです。大きい事件はすべてあなたのところに持って来、小さい事件はみな、彼らがさばかなければなりません。あなたの重荷を軽くしなさい。彼らはあなたとともに重荷をになうのです。23 もしあなたがこのことを行えば、—神があなたに命じられるのですが—あなたはもちこたえることができ、この民もみな、平安のうちに自分のところに帰ることができます。]) をメモだけしておいて下さい。旧約聖書の中でモーセがイスラエルの解放者として立てられ、そして荒野の集会のリーダーとして立てられてから、モーセの下に 70 人の長老たちがモーセのリーダーシップをアシストするべく立てられていくんですが、彼らの資質・資格もやはり能力というよりも、技能というよりも、キャラクター、その性質、”being”というところであり、それは先程の箇所を後で開いて読んで頂ければ分かると思います。

前置きはこれぐらいにしまして、早速その牧師の資質、教会のリーダー若しくは家庭のリーダー、職場のリーダーの資質と言っても良いと思います。そこをまずは通して読みたいと思います。**第一テモテ 3:1~13**。『1 「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということは真実です。2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、3

酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、<sup>4</sup>自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。<sup>5</sup>—自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう—<sup>6</sup>また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。<sup>7</sup>また、教会外の人々にも評判の良い人でなければなりません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。<sup>8</sup>執事もまたこういう人でなければなりません。謹厳で、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利をむさぼらず、<sup>9</sup>きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人です。<sup>10</sup>まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点があれば、執事の職につかせなさい。<sup>11</sup>婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。<sup>12</sup>執事は、ひとりの妻の夫であって、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。<sup>13</sup>というのは、執事の務めをりっぱに果たした人は、良い地歩を占め、また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるからです。』13節までお読みしました。監督、執事、また婦人執事。これらの言葉も追々詳しく説明していきますが、これらが当時の教会のリーダーのタイトル・役職というものであります。一読して一目瞭然だというのは、ここに問われている資質・クオリティーというのは、クリスチャンとしてごくごく普通のものと言えらると思います。意外かもしれません。監督だとか、執事だとか、教会のリーダー、牧師ということになれば、普通よりも何か特別なもの、それが求められる、問われるように思われます。でも、非凡なものは特別ここには見られません。むしろクリスチャンとしては平凡なものばかり。クリスチャンなら普通はこうでしょう。まあ、平均的なクリスチャンならば、当然これぐらいでなければと。まあ、当たり前なのが問われているだけであります。しかし、この当たり前のことが案外と難しいということです。言うは易し、行は難しです。ただ、どうしてこんな普通のことか紙面を割かれて伝えられているのか。テモテには既にパウロは口頭で伝えてはいなかったのか。こんな当たり前のことを今更言う必要はないんじゃないかと。テモテは知らなかったのか、とすら思うんですけども、ただ皆さん思い出して下さい。この手紙が書かれている背景は、エペソの教会に偽教師たちが入り込んで来て、違った教えをするようになったわけです。そこで若い牧師のテモテは非常に苦慮して、大分落ち込んでいたところでありました。で、そんなテモテを励ます目的でパウロはこの手紙を書き、そして”パウロが教えていること”をテモテに対して変えることなく忠実にエペソの教会に続けて伝えるようにと。追認する意味でもこの手紙を書いたわけです。ですから、パウロは既にテモテに語っていたことをもう一度文面にして、それを追認しているわけです。そして偽教師たちを牽制しているわけでありました。ここに書かれているごく普通のクリスチャンとして当たり前のクオリティーは、偽教師たちの中には見られなかったものばかりです。偽牧師の中には、これとは正反対の者が大勢いたということです。まあ、偽教師、偽牧師とか偽宣教師といった偽の働き人の実態については**第二ペテロの2章**でも既に学んできたところでありました。ですから、後ほど**第二ペテロの2章**のところと、偽教師の特徴と、また**第一テモテの3章**の本物の教師、本物の牧師の特徴を是非比べて頂いて、全くクオリティーが違うということに皆さんも気付かされると思います。

で、特に牧師については皆さんにお薦めしたい推薦図書もあります。スポルジョンの『牧会入門』という本。またロイド・ジョーンズの『説教と説教者』という本。さらには私の牧師、カルバリーチャペルの特徴を書いているチャック・スミスの本です。また『情緒的に健康な教会を目指して』という本もお薦めしたいと思います。ピーター・スキヤザローという人の本です。後でこの本から引用もしたいと思います。そしてもう一つ忘れてましたが、『牧師の仕事』という薄い本なんですけれども、非常によくまとまった私の大好きな本があります。ウィリアム・スティルという人が書いてる本です。『牧師の仕事』。すべてお薦めしたいと思います。私は牧師じゃないから関係ありませんと思って、<sup>ひとごと</sup>他人事と思ってはいけません。他人事と思わないで頂いて、皆さんは**ほんにんごと**と思して下さい。教会のリーダーシップは、なにも牧師にだけ

任されているわけではありません。靈的に成熟しているならば、誰もがリーダーになるべきです。男だろうと女だろうと関係ありません。また家庭においてもリーダーシップが必要です。夫がいれば、父親がいれば、勿論靈的リーダーは夫となりますけれども、いなければ女性の婦人たちが、母親なり妻が、リーダーシップをとらなければいけません。ましてや夫がノンクリスチャンならば、靈的リーダーシップをとることは出来ないわけです。そういったことも是非自分に当てはめながら、これを他人事と思わないで、自分にも当てはめながら、自分にも問われているクオリティーである。自分にも必要とされている項目であるというふうに見て頂きたいと思います。で、まだ若い人も、ここには小学生もいますが、これから自分もリーダーになっていくということを感じて頂いて、救われたばかりのまだ信仰歴の浅い未熟な人たちも、これから自分は靈的に成熟して、いつかリーダーに召されていくんだということを願い、希望を持って、期待を持って、また学びに臨んで頂きたいと思います。

で、“監督”という言葉が出てきたんですけれども、“監督”という言葉の他に教会のリーダーを指す言葉、若しくは指導者を指す言葉です。他にも“長老”という言葉があります。そして“牧師”という言葉があります。“長老”、“監督”、“牧師”。これは聖書の中でほとんど同義的に交互的に使われます。同じ意味合いで交互に使われる、“interchangeably”です。交互に使われるということで、“長老”は読んで字の如く『年を経た者、年を重ねた者、年齢が上の者』と思うかもしれませんが、これは単純に生物学的に年老いているだけでなく、靈的にも成熟した人物ということです。ですから、年が若くても靈的に成熟しているならば、“長老”と呼ばれるわけです。で、“監督”は『群れを見守る、世話をする人』。使徒 20：28 を読みたいと思います。『あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。(これはパウロがエペソの教会の長老たちに、お別れのメッセージを語っている場面です。) 聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために (“牧させるために” というのは、御言葉で養わせるために)、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。』“監督”という言葉が出てきました。また“監督”は同時に牧会の働きをするわけです。これをパウロは長老に語ってるんです。長老も監督も牧師もほぼ同じ意味で同義的に使われ、またこれらの役職なりタイトルが交互に使用されているわけです。

テトス 1：7 にも“監督”という言葉が使われております。テトスは既に学び終えておりますが、これも牧会書簡です。ですから、テトスとテモテは非常に似通っているわけです。そこにも牧師の若しくは監督の資質というものがリストアップされています。『監督は神の家の管理者として』とあります。監督は神の家の管理者、教会の管理者でもあるということです。詳訳聖書ではこの“監督”を『主管』という言葉を使っています。で、よくこの『主管』という言葉は牧師にも使われ、“主管牧師”他にもその“主管牧師”の下に複数の副牧師がいる場合、“アシスタントパスター”とも言います。若者たちの牧師は“ユースパスター”とも言います。また他にも“協力牧師”、“アソシエイトパスター”とか、いろんな牧師がいる中でその一番上に立つ、最も重い責任を負っているのが『主管牧師』若しくは『主任牧師』と言われる人。それは“監督”と言って良いと思います。ですから、監督は群れを見守って、世話をし、また管理をする、取締まる、指導する、指揮をする。スポーツの監督もそうですね。映画の監督もそうです。現場の監督もそうです。それと似通っているわけです。全体を見守りながら、全体の世話を請け負うわけです。管理、取締り、指導、指揮をする者。一番偉いように思いますけれども、でもその一番偉いように思う仕事は、一番違った意味でエライんです。それはえらく重い仕事ということです。責任が非常に重い仕事ということです。で、“牧師”というのは、単純に『羊飼い』という言葉であります。ですから、羊飼いは羊たちを牧草によって養うわけですが、靈的羊飼いは、牧師は、教会に集う羊たちを御言葉という牧草によって養い育てるわけです。長老、監督、牧師。これを、それぞれの違いを英語で、三つの“M”で表現したいと思います。長老は“Men”。靈的に成熟した人物です。で、監督は“Ministry”。その働きです。で、牧師は“Method”。方法ということです。方法は御言葉で養う。長老は“Men”、監督は“Ministry”、牧師は“Method”。

この三つの M でそれぞれの役職の違いを単純明快に知ることができます。心に留めておいて下さい。で、またこれらから今日の教会の政治若しくは政治形態というものが誕生しました。”Church government”というものです。“監督制”、“長老制”、そしてもう一つが“会衆制”といものがあります。で、“監督制”というのは、プロテスタントでは聖公会とか、メソジスト、またペンテコステの多くの教会です。で、“長老制”は、これは一人のリーダーではなくて、複数の長老たちというリーダーによって治められるシステムです。今で言えば役員さんたちによって統治される政治形態。で、三つ目の“会衆制”。これは主にバプテスト教会とか、またブラザレンと呼ばれるグループが多いと思いますけれども、彼らは聖書では万人祭司と説かれているので、すべてのクリスチャンは祭司であるから、すべてのクリスチャンはリーダーであると。で、教会員によって構成される総会というものがあまして、それによってそれぞれ評決が取られ、選挙で、民主主義で教会が運営されていくというシステムであります。ただ、この会衆制というのは聖書の中には全く言及されていないものですから、ハッキリ言いますと非聖書的な教会政治形態であります。先の二つは監督制、長老制。これらは聖書の中にも見られます。ただ私の母教会のカルバリーチャペルは、監督制に近いような教会政治形態をもっておりますけれども、さらに忠実に聖書の中にそれを見出し、原型は旧約聖書の荒野の集会。古代イスラエルのモーセが神の代理者となって、その下に 70 人の長老が置かれていく。監督の下に長老たちが置かれていくような、そういうシステムです。それは勿論新約聖書の初代教会にも見られるシステムであります。で、このマラナサ・グレイス・フェローシップもそれに倣う政治形態というシステムをもっております。詳しいことをここで述べることはいたしません、カルバリーチャペルの特徴というチャック・スミスが書いた本が大体それらの違いを明確にして、私たちに教えてくれておりますので、読んでない方は MGF の必読書ですから、是非読んでおいて下さい。

で、話を戻したいと思います。今私たちは**第 1 テモテの 3 章**から監督についてまず見たいと思います。もう一度 1 節を見て頂くと『**「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは真実です。**』監督の職、これは素晴らしい仕事である。英語の聖書では”Good work”（グッドワーク）と書いてあります。良い仕事。ただ”work”という言葉は、他にも『働き』というふうにも訳せます。“Good job”（グッドジョブ）だとは言っていないんです。”Good work”だと言ってるんです。これは微妙な違いですけれども、違わないように思うかもしれませんが、実は大きな違いです。監督の仕事、または牧師の仕事は、“グッドワーク”であって、“グッドジョブ”ではないんです。“ジョブ”というのはむしろ『職業』と訳されるべきもの。”vocation”とも英語で言いますが、“ジョブ”じゃなくて“ワーク”。“ワーク”は働きなんです。“ジョブ”というのは時間が決まっています。タイムカードが押されるわけです。でも“ワーク”は、これはタイムカードで決められるようなものではありません。“ワーク”には休業はないんです。働きには休みがないんです。牧師は職業というよりも、これはライフワークと言って良いと思います。牧師の仕事、それは羊飼いの仕事ですから、羊を相手にする限り、待ったなしです。「今日は疲れているから休みましょう。」でもその間に羊たちは飢えているわけです。その間に羊たちは敵の脅威にさらされているわけです。その間に羊たちは散り散りバラバラに失われようとするわけです。ですから羊飼いに休みはないんです。でもそれは素晴らしい働きです。羊飼いは、牧師には、基本的には引退というものはありません。勿論体力の面で病気や怪我で引退を余儀なくされることもあるでしょうけれども、ただ基本的に牧師には引退はありません。牧師には勿論休みもないんです。24 時間牧師は、牧師です。教会から一歩外に出たら、牧師でなくなることはありません。家庭においても牧師は、牧師です。教会においても牧師は、牧師です。どこにおいても牧師は、牧師であります。でも勿論教会に雇われる職業牧師というものもあります。長老制の教会などでは長老たちが牧師を雇うわけです。役員が気に入る牧師を雇って、気に入らなくなったら牧師を罷免したりするわけです。会衆制は多数決で、選挙で、リーダーを決めたりするわけです。ですから当然任職期間というのがあったりして、それが来たらまた交代するというこ

ともあるわけです。でも本来牧師は羊飼いですから、羊飼いは休業なんてものはありません。廃業もないわけです。牧会はライフワークであります。これは子育てと同じであります。親である限り、子どもは待ってくれません。「ちょっと休ませてくれ」というわけにいかないわけです。「もう子育てに疲れたから、子育てやめましょう。」とか、「今日は子育てお休みにします。」とか、そういうわけにいかないわけです。子どもはお腹をすかせてます。赤ちゃんならば、おしめを替えて欲しい。ミルクが欲しい。常に世話をしなければならぬわけです。ですからこれは職業というよりも仕事なんです。働きなんです。素晴らしいポジションではなく、素晴らしい仕事です。素晴らしいサラリーじゃなくて、給与じゃなくて、素晴らしい仕事なんです。それに見合った給料はもらえないかもしれません。素晴らしい引退後のプランじゃなくて、素晴らしい仕事で、これは引退のない仕事ということです。素晴らしいタイトルでもありません。肩書じゃないんです。これは素晴らしい仕事なんです。“この仕事につきたい”という言葉なんです。この“つきたい”という言葉は『大志を抱く』というふうに訳される言葉です。「少年よ、大志を抱け。」とクラーク博士は言いましたが、『もし監督の職につきたい、(牧師になりたいという大志を抱くならば、)それはすばらしい仕事を求めることである』と。ただ素晴らしい仕事とは言っても、それは素晴らしく重い責任を問われる仕事でもあります。ですからヤコブ 3:1 ではこう言っています。『私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。』牧師はただの職業じゃないと言いました。朝 8 時から夕方 5 時までの仕事じゃないんです。夜中だろうと、明け方だろうと、休みの日だと思っても、急な電話や急な訪問、急な出来事、それにすべて対応しなければいけません。365 日です。そして魂を取り扱う仕事をしてるわけです。これは人間の肉体の命よりもはるかに重いものです。肉体はいつかは滅びて土に帰るわけです。でも魂は滅びることがないんです。魂は永遠に生き続けるんです。ただその生き続ける場所は、同じではありません。イエス・キリストを信じる者ならば、その魂は天国において永遠に生き続けます。でもイエス・キリストを信じていないその魂は、地獄において永遠に苦しみ続けるんです。その天国か地獄の行き先を大きく左右してしまうのが、この牧会という仕事であります。またイエス・キリストを信じる者たちの魂を預かってはいますけれども、ただ天国に行けばそれでいいという話じゃなくて、天国においてその魂がしっかりと地上で蓄えた天の宝に与ることが出来るように、報いに与ることが出来るように、天国を最大限エンジョイすることが出来るように。そのためにも牧師は置かれているわけでありまして。ですから人の命よりも重い魂を取り扱う仕事をしている。その仕事は確かに素晴らしい仕事なんです。人間の命を預かるという医療の仕事も素晴らしいですけれども、それ以上に素晴らしい仕事ではあるんです。ただし、それ以上に責任が重い仕事であるということも忘れてはならないということです。下手に取り扱えば、格別厳しい裁きを受けるわけです。医療ミスどころじゃないんです。牧会ミスは致命的なんです。血の責任を牧師は問われます。で、これは勿論牧師だけじゃなくて、すべてのクリスチャンはリーダーに召されているということもあらかじめ言いました。ただそれぞれ召しが異なるわけです。賜物も異なるわけです。すべての人がリーダーだからと言って、牧師になるわけじゃありません。監督になるわけじゃありません。長老や執事になるわけじゃないんです。でも何らかの領域において、あなたは成熟したクリスチャンを目指すならば、大なり小なりリーダーシップをとることになります。だれでも神のしもべであるからです。だれでもミニスターであるからです。イエス・キリストに用いて頂きたいと願うならば。「よくやった。良い忠実なしもべだ。」と褒め言葉を頂きたいと思うならば、今から見るこのリストは皆さんにとって無関係なものではない、他人事ではないということを感じて頂きたいと思えます。教会だけでなく、所謂ミニストリーだけに適用されるのではなく、家庭にも職場にも当てはまるということです。学校でもリーダーシップをとることが出来ます。職場でもリーダーシップをとることが出来るわけです。近隣社会でもリーダーシップをとることが出来るわけです。子育てにおいてもリーダーシップをとることが出来るわけです。素晴らしい仕事です。ただ、

素晴らしく思い責任も伴うということも、常に心に留めておいて下さい。

で、次に**2節**の方に目を移して下さい。『**2**ですから、監督はこういう人でなければなりません。(ここから具体的な牧師、教会リーダーの資質を問うところです。そこには神学校を卒業しているとか、牧師の免許を保有しているとか、按手札を受けているとか、そんなことは一切書かれておりません。ただ書かれているのはキャラクターです。そこで問われているクオリティーは、人格、品格、性質、性格というものです。) すなわち、非難されるどころがなく (いきなりトップリストから『非難されるどころがなく』と。これは“責められるところがない”とも訳せます。ただ誤解しないで下さい。“完璧である”という意味ではありません。“パーフェクトである”という意味ではありません。“罪を犯さない”という意味ではありません。これは他の聖書の箇所からも明らかです。『すべての人は罪を犯したので、神の栄誉を受けることはできない。』と。『義人はいない。一人もない。』と聖書に明言されています。ですからこれは“完璧”パーフェクトな人を指しているのではなくて、むしろ“<sup>とが</sup>咎められるところがない”“責められるところがない”。またこの言葉は形容詞なんですけれども、**5章7節**では『そしりを受けることのない』というふうに訳されています。また**6章14節**では『私たちの主イエス・キリストの現れの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。』と、ここにも使われています。第1テモテの中では三回使われているわけですが、動詞では**6章12節**に使われています。『信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。』“獲得する”というのが動詞です。**6章19節**、そこにも動詞が使われています。『また、まことのいのちを得るために』“得る”という言葉、これも“獲得”と同じ言葉です。動詞形が使われています。ですから、この『非難されるところがない』というのは、“獲得されるところがない”というふうにも訳せるわけです。または“つかむ”という言葉でもありますから、“捕まらない”“逮捕されない”というふうに訳せるわけです。非難されるところがない、<sup>とが</sup>咎められない、責められない、捕まらない、逮捕されるところがない、とえばだんだんこの言葉の意味が見えてきたと思います。常識的にこのことを考える時に、完全無欠な人間を指しているわけじゃないことは明らかです。完全無欠でないにしても、それでも逮捕されるような犯罪者ではないということです。最低限のことが言われているわけです。それでも明らかに聖書で禁じられているような不法な違法な罪を犯しているわけじゃないということです。明らかにこれは聖書的に間違っているというようなことをしている人は、当然監督としてはふさわしくないわけです。当然いけないことをしている、良心が咎められるようなことをしている。分かり易く言うならば、麻薬をやりながら牧会は出来ないわけです。当たり前のことですけれども。常識的なことですけれども。それがこの『非難されるところがない』ということです。一般的にも教会内外から見て、常識のレベルで非難されるところがないということです。法的に咎められない。違法行為をしていない。逮捕されるようなことをしていない。また、“捕まらない”という言葉から、麻薬に捕まらない、お酒に捕まらない、タバコに捕まらない、ギャンブルに捕まらない。すなわち中毒になっていない。依存症でない。他にも仕事に捕まらない。仕事中毒という言葉もあります。ですから何らかの中毒症、何らかの依存症を持っている、何かにつかまれてしまっている人は、そもそも牧師にふさわしくありません。残念ながら私は、ニコチン中毒の牧師やアルコール中毒の牧師やパチンコ中毒・依存性の牧師を知っております。教会から支払われる給料を彼らはそうしたものに充てがっているわけです。彼らは牧師としては全くふさわしくありません。でも彼らは神学校を卒業しているんです。でも彼らは牧師の免許を持っているんです。でも聖書ではそれらは牧師としてはふさわしくないと。最初のリストからもう既に彼らは除外されてしまうような者であります。ただ、仕事中毒というのは、これは気を付けなくてははいけません。麻薬だとか、アルコールだとか、ニコチンだとか、またギャンブルとは違って、仕事というのは良いものとされます、正しいこととされます。でも、この仕事は偶像になり得るものです。で、仕事というのは教会の仕事として、またミニストリーという仕事として、これもまた偶像になり得るということも知って頂きたいと思います。神よりもミニ

ストーリーを優先してしまう。これは立派なミニストリー中毒です。ミニストリーという聖なる仕事すら、偶像化されてしまう。これはサタンの罠です。大半のクリスチャンは麻薬だとか、アルコールだとか、ニコチン、ギャンブルには、そそのかされないと思います。それはいけないことだと、手を付けてはいけないことだ、関わってはいけないことだと、常識的に判断出来るからです。でも、これがミニストリーだったらどうでしょうか。神様と個人的な交わりを持つ時間は無い。教会の仕事が忙しくて。家族と時間を過ごしているそんな暇は無い。奉仕が忙しくて。それは立派な奉仕中毒です。仕事中毒です。神との個人的な時間を疎かにしてまで、神は自分のために働いてもらいたいと思いません。「勝手にわたしの名を使うな」と、おっしゃると思います。「あなたに働いてもらいたいとはわたしは思っていない。」もっと言えば「あなたなんか必要ないんだ」と。神一人ですべてのことが出来るんです。にもかかわらず、私たちのような者を使って下さるわけですから、私たちは仕事に溺れてはいけません。むしろ溺れるべきは神の愛に溺れるべきです。神と深い愛の関係を持つべきです。このことを神は望んでいるんです。神を愛しているから、神の仕事に与るだけであって、仕事を愛してしまったら、これは本末転倒であります。素晴らしい仕事ではありますけれども、神以上に愛すべきものではないということです。その仕事は、社会で役に立っているかもしれません。家族を養い、家族にも喜ばれているかもしれません。あなたも満足して、立派な仕事だと思っているかもしれません。そのボランティア活動、その慈善活動、その社会活動、福祉活動、皆立派な素晴らしい仕事にあなたも思っているかもしれませんが、でも神以上のものではないということを知って下さい。それが『非難されるところがない』という意味であります。

で、次にリストとして挙げられているのは、『ひとりの妻の夫である』ということ。今日であれば、これは当然のことだと。一夫一婦制というのがあります。一人の夫に対して一人の妻。でも、かつてはそうじゃなかったんです。日本もそうでした。昭和の初期までは、一夫多妻は社会的に通用していたわけめかけです。妾を持つ。二号さん、三号さん。そんなのは当たり前だったわけです。男の甲斐性なんて言われていたわけです。妻以外に別の女性を囲むなんていうのは、それはもう当然のことで、甲斐性のある男ならそんな女性の一人や二人当たり前だという時代があったわけです。で、パウロの時代も、二千年前ですが、ギリシャ文化の影響を受けて、ギリシャ人の考えでは、男なら必ず三人の女性を持つ。一人は話し相手としての女性。もう一人はセックスの相手の女性。性欲を満たすだけのほけ口です。慰安婦みたいな存在です。もう一人は子どもを産んで育てる女性です。家事をする女性です。それが所謂妻ということになりますけれども。まあ、そういうギリシャ文化の影響を受けたのがローマ帝国です。グレコローマンとも言います。ギリシャ・ローマ文化です。その中でエペソの教会もまさに一夫多妻だったわけです。エペソにはあの有名なアルテミス神殿もあったわけです。そこには豊穡の女神、セックスの女神が祀られていて、神殿娼婦も大勢いたわけですから、自分の妻以外に沢山の女性と性的に交わるなんてことは、このエペソの町では日常茶飯事だったわけです。しかし、リーダーならば、教会の指導者ならば、一人の妻の夫でなければならない。社会が何と言おうと。教会のリーダーは、ひとりの妻の夫でなければならない。これは聖書がそう定めているからです。一人の夫に対し一人の妻です。アダムに対しエバが造られたんです。で、また『一人の妻の夫』という言葉は、“一人の女のための男”というふうにも訳せます。一人の妻のために夫は身をささげるんです。勿論死別したら、再婚も出来るわけですがけれども、誤解している人たちもおりまして、『ひとりの妻の夫』というのは、これは妻と死別した後も再婚できない、再婚してはいけない、というふうに考えて、牧師は離婚して再婚するというのは勿論論外なんですけれども、死別してからまた新しい別の人と出会う結婚して再婚するということも許されないと、そういう解釈をする人もいますけれども、それは拡大解釈だと思います。死別したら結婚の関係は解消されるわけですから、それはまた新たに再婚できる資格を得るわけです。で、もう一つの誤解は、『ひとりの妻の夫』という言葉から、教会のリーダーは必ず結婚していなければならない、という、結婚が条件となっていると考えるのもこれもまた誤解です。

拡大解釈と言って良いと思います。というのは、これを書いたパウロは独身だったからです。「でも、パウロだってかつては結婚していたはずです。」と。「そうでなければ彼はサンヘドリンの議員になれないし。」クリスチャンになった時に、少なくとも妻がパウロを離縁して、パウロの元を去ったのか、それとも死別したのか、そのへんは聖書は語っていないので、私たちも深入りは出来ません。ただこの手紙を書いた時点でパウロは独身だったことは間違いありません。かつては結婚していたということです。でもパウロのことを持ち出すまでもなく、私たちの究極の牧師、大牧者イエス・キリストは独身だったということです。ですから、大牧者が独身だったわけですから、牧師は結婚していなければならない、というのは、これは条件にならないわけです。ただ『ひとりの妻の夫』というのは、特にこれは性的にふしだらでない。性的にルーズでないということが一つ言えるわけです。性的に不道德な罪を犯しているような者は当然リーダーとしてふさわしくない。ポルノ中毒であるとか、また不倫をするような人はリーダーとしてふさわしくないということです。

次に『自分を制し、慎み深く、品位があり』。この三つはほとんど類義語であります。“自分を制する”、『控えめ』というふうにも訳せます。“落ち着いた”とか、“真面目だ”というふうにも訳せます。『慎む』と訳されますから、次に続く『慎み深く』ともほとんど同じ意味です。また、“素面<sup>しらふ</sup>”というふうにも訳されます。お酒に酔っていない素面の状態。でも、次に続く『慎み深く』という言葉も“素面”というふうにも訳せるんです。ですからほとんど同じ意味で使われています。で、『品位』という言葉も、これも“つつましい”と訳されます。第1テモテ2:9では、『同じように女も、つつましい身なりで、控えめに慎み深く身を飾り、はでな髪の形とか、金や真珠や高価な衣服によってではなく、』“つつましい”というふうにも訳されている言葉です。そこは『品位』という言葉でもあります。『品位ある服装』ということです。何故同じような言葉が三回も繰り返されているのか。勿論これは強調しているということです。監督たる者、牧師たる者は、この三つに共通して言える概念は、つつましい者でなければいけない。特に『自分を制する』というのは、“自制”というふうにも読めるわけですが、自分の感情のレベル、精神のレベルでつつむということ。で、『慎み深く』という言葉は特に原語を見ると“考える”という言葉が含まれています。ですから“考え”だとか、“マインド”。「その考え方において慎み深い。」「考え方が健全である」とも直訳できます。で、『品位』の方は特にこれは“振る舞い”とか“態度”において。服装にも使われる言葉ですから、『振る舞い』とか『態度』。まあ、見た目においても、それはつつましいということです。同じ“つつましい”という言葉ですが、でも、『自分を制する』は、特にこれは内面の部分。精神だとか感情の面。情緒の面です。それが落ち着いてないといけないうわけです。情緒不安定ではいけないということです。で、『慎み深い』というのは、考え方においてということです。マインドにおいて。で、『品位』というのは、振る舞い、態度、見た目においてということです。一言で言い換えるならば、全人的につつましいということです。内面においても、精神においても、感情においても、情緒においても。又、考え方においても、振る舞いや態度においても、ありとあらゆる領域においてつつましい、真面目である、落ち着いている、控えめである、素面であると。そのようにここを見ることが出来ます。ただこれはクリスチャンとしては当然と言えば当然のこと。別にこれは、監督だとか教会のリーダーに敢えて特別に問われるようなものじゃなくて、クリスチャンならば誰もがこれらのクオリティーを持ち合わせているべきであるということです。ということは、リーダーは普通のクリスチャンということです。誤解を避けて言うならば。誤解を招くような言葉ですが、普通のクリスチャンです。でも普通のクリスチャンであることが、生やさしいことじゃないことは皆さんよく知っていると思います。普通のクリスチャンとは、キリストのようなクリスチャンということです。

で、次に続くのが『よくもてなし』という言葉です。この『よくもてなす』という言葉は、英語では“hospitality”（ホスピタリティー）という言葉が充てられていますけれども、直訳は『外国人だとか他人、



お客さんを愛する』という言葉です。これも、監督、教会リーダーに必要な資質であります。外国人、文字通り外国人が良いと思います。最初の教会はユダヤ人クリスチャンで構成されていましたが、そこに外国人もイエスを信じて、異邦人たちも入ってきたわけですが、彼らも愛されるべき存在として、歓迎されるべき存在として、受け入れられていったわけです。それを牧師が率先して受け入れていくということです。この教会にも、国籍の違う人たちも集まっています。アメリカ人だとか、韓国人だとか、最近ではインドネシアの若者も来ておりますけれども、そのようにして外国人も、そしてお客さんも、MGFに普段集っていない、たまに来るような来客の人たち、新来者の人たちも牧師は愛していかなければいけません。で、勿論これは牧師だけに問われているクオリティーじゃないことは明らかです。旅人をもてなすように。これはユダヤ人にも求められています。新約聖書でもすべてのクリスチャンに求められていることです。旅人をもてなすように。その人が何者であれ。この教会に立ち寄った人たち、外部から来た人たちに対して私たちは、もてなす必要があります。新来者に対して、あなたは声を掛けているでしょうか。挨拶をしているでしょうか。温かく迎えているでしょうか。熱くもてなしているでしょうか。そういう姿を子どもたちも見ています。

そして次に求められているのが『**教える能力**』であります。この“教える能力”だけが、所謂能力として問われていること。技能・技術として問われていることです。その他はすべて、技能・能力というよりも、キャラクターです。品格というもの、人格というもの、性格というものであります。“教える能力”だけです。能力として問われているのは、勿論ほかにも牧師には技能・技術が必要ですが、ただ“教える能力”だけが、敢えて一つだけここで挙げられているのは、これが最も重要だからであります。これ以外に必要なというのではなくて、これが必要不可欠だということです。教える能力の無い監督だとか、牧師は存在しないということです。ありとあらゆる牧師が持つべき能力の中で、最重要の能力が“教える”ということです。勿論“教える能力”があっても、これらのキャラクターが伴っていなければ、その人は牧師としてふさわしくないわけです。いくら有名な神学校を卒業してしようとも。ヘブル語やギリシャ語に精通してしようとも。聖書学者と呼ばれるような人であろうとも。これらのキャラクターを身につけていなければ、その人はやはりリーダーとしてはふさわしくないわけです。でも、その逆にこれらのキャラクターを持っていても“教える能力”が無いならば、その人は監督として、牧師としてはふさわしくないということです。クリスチャンとしては素晴らしいですけども、リーダーシップをとることは出来ないということです。**第1コリント1:21**。これもパウロが書いた手紙です。『**事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教の**ことばの愚かさ**を通して、信じる者を救おうと定められたのです。**』特に後半の「宣教の**ことばの愚かさ**を通して、信じる者を救おうと定められたのです。」というところに注目して下さい。“宣教の**ことば**”というのは、『説教の**ことば**』とも訳せます。『説教の**ことばの愚かさ**を通して、信じる者を救おうと定められたのです。』と。神は“説教の**ことば**”を通して、救いの働きをなされるということです。教える能力だけが、ただここにリストアップされ、ただこれだけが敢えて際立つようにパウロは意図して載せたわけです。20世紀の最大の説教者の一人であるD・M・ロイドジョーンズ(1899~1981)その人が「説教は私のライフワークでした。」と述べてます。このロイドジョーンズは英国の王室付きの医者だったんです。イギリスの超エリートのドクターだったわけです。メディカルドクターだったわけです。でも神様に召されて、将来嘱望された若き医師だったんですけども、彼は説教者になることを選び、そして「説教こそ私のライフワークでした。」と。40年余りの牧会生活を振り返ってそう言ったわけです。また、こうも言ってます。「私にとって説教は、人が召されてすることのうちで最も偉大で栄光に富んだものである。」医師として活躍したわけですけども、それでもロイドジョーンズによれば、「私にとって説教は、人が召されてすることのうちで最も偉大で栄光に富んだものである。」またロイドジョーンズはこうも言ってます。これはホームペー

ジにも載せている言葉です。「真の説教があれば、人々は必ず礼拝に来る。」本物の説教があれば、人々は必ず礼拝に来るといふものです。「どうしてうちの教会には人が集まってこないのか。」ひょっとしたら、真の説教がなされていないからかもしれません。またロイドジョーンズはこうも言っています。「退屈な説教は、言葉からして矛盾している。もし退屈させるなら、彼は説教者ではない。」と。退屈な説教は、言葉からして矛盾している、というのは、“説教は退屈なものじゃない”ということです。説教の言葉の愚かさを通して、神は人を救いに導かれるわけです。

また、『説教史』というものがあります。その中で著名な説教者たちのことを少し皆さんに取り上げてご紹介しておきたいと思ひます。宗教改革者のマルティン・ルター（1483～1546）です。「日曜日には三回の一般礼拝があった。朝5時から6時までパウロの書簡について。9時から10時まで福音書について。午後はいろんな時間に朝の主題の続きか、教理問答書についてである。教会は一週間中閉められず、月曜日と火曜日には教理問答書について。水曜日にはマタイの福音書について。木曜日と金曜日には使徒の書簡について。土曜日の夕方にはヨハネの福音書について説教があった。」これはルターが牧会したヴィッテンベルクの教会の一週間のプログラムだったわけです。ルター自身も説教について、「家族礼拝を含めてルターは日曜日にしばしば4回説教したし、四季には教理問答について一週間4日の二週間連続説教を行なったのである。現存している彼の説教の総数は2300篇ある。最高数は1528年でその年には145日間に195篇の説教が行なわれているのである。」と。「ルターの説教の努力は、聖書の言葉に対して“かつてそこで”の意味をどのように正しく見出すか、というのみでなく、“今ここで”の言葉として、それをどのように取り次ぐかに向けられています。」と。「彼の説教にはそのように会衆の状況を汲み取って、それを説教に取り入れて語る形で、会衆の必要に対して応えていこうとする配慮が随所に見受けられます。」と。これは『世界の説教史』という本の中からの引用であります。“かつてそこで”の意味も正しく伝えているんですけども、それではただの講義です。でも“今ここで”それが説教なんです。教えられたことを“今ここで”適用するわけです。まだ2300篇には到底及ばないと思ひますけれども、それを超えたいと思ひます。

もう一人の宗教改革者、ジャン・カルバン（1509～1564）は、「スイスのジュネーブで前後25年間その激務に在って、ほとんど毎日を説教のためにささげた人物です。例えば日曜日の朝は新約、午後は新約あるいは詩篇。終日は旧約についての説教がなされました。そしてそれらの説教は章節をおってなされる連続講解説教でした。従ってその説教には特別な表題もなく、主題中心の起承転結もなく、ただ聖書のテキストが読まれ、しばしば「私たちが昨日あるいは先週見たように」、で始まり、締めくくりの祈りで終わるというものでした。そして彼のそのような説教は時には二時間余りに渡ることもあったと言われています。」勇気づけられます。カルバンは二時間余り説教したんです。「そのようにカルバンの連続講解説教は、例えば申命記から200、ヨブ記から159、イザヤ書から343、エゼキエル書から174、使徒の働きから149、その他に創世記、ダニエル書、書簡などから多数なされたのでした。カルバンは説教の原稿は書かず、聖霊の導きを求めつつ語ったと伝えられています。」私も原稿は書きません。「さらに彼は、説教は聖霊の働きによるものであるというところから、彼の説教の速記録に手を加えなかったのみならず、その説教は自分の会衆に向けてのみ語られたというところから、その出版も望みませんでした。しかし友人や教会員の切望により、彼の説教はその晩年から没後にかけて次々と刊行され、各国語に翻訳されていったのでした。」と。

で、もう一人18世紀のジョン・ウエスレー（1703～1791）です。このウエスレーは特定の教会にとどまるというよりも、巡回説教者として各地を周った人であります。英国国教会からその働きの門戸を閉ざされたウエスレーを中心とするメソジスト運動は、<sup>おの</sup>自ずと教会外にその説教の場を求めざるを得ませんでした。望んで巡回説教者になったのではありません。英国国教会の司祭だったんですけども（聖公会のことです。）、ウエスレーはそこから追い出されてしまったので、メソジスト運動というのを展開して英国

にリバイバルをもたらしたわけです。聖公会が世俗化して非聖書的な死んだような状態に陥ってしまったので、彼は聖書に立ち返ってリバイバルを起こしていったわけです。で、彼は福音を語るためにあらゆる所に赴き、その生涯に渡る伝道旅行は40万キロにも及んだと言われています。69歳までは馬の背に<sup>またが</sup>跨り、それ以後は馬車に乗り、一日に二・三回のメッセージを為し、その数は生涯で4万回以上になったと言われています。大分高いハードルになってしまいましたが、まずはルターを超えたいと思います。で、彼は宗教改革において主張された信仰による救いを根本のものとして語りますが、そこからさらに進んで聖化の生活の重要性を説くことに、とりわけ強調点を置いています。『聖化』、”Sanctification”。“聖く変えられる”という言葉です。救いとは単に地獄から救い出され、天国に入ることではない。それは我々の魂が義と聖において神のかたちへと新生していくことである。キリストの似姿に変えられていくこと。それをメソジスト運動で強調したわけです。このような彼のメッセージは当時の霊的に沈滞した英国の信徒たちを覚醒し、また福音を知らずに道徳的に退廃し、経済的に破綻を来たしていた多くの一般民衆を救い、正しい生活へと導く指針となりました。そしてイギリスにはリバイバルをもたらされたわけです。

で、最期に挙げたいのが、チャールズ・ハドン・スポルジョンです。19世紀の偉大な牧師です。1860年にはロンドンにメトロポリタン・タバナクルを建設。これは当時世界最大の教会です。毎回六千人を超える人々の前で説教を続けました。スポルジョンは一週に10回程度説教をするのが普通であり、特に日曜日の朝・夕の集会は大きなものとなったようです。彼の説教はしばしば二時間にも及ぶことがあったようです。スポルジョンも二時間説教したんです。これでもう私の説教時間は正当化されていると思いますので、長いと言わないで下さい。で、力溢れる説教を聴き、飽きる者もなく、終始立ったままで聴いた者も多かったと記録されています。立ちっぱなしで聴いていたということです。また、スポルジョンの『パスターズ・カレッジ』、これは牧師を養成する学校です。そのパスターズ・カレッジでなされた説教に関する講義の中で、これは『牧会入門』という本にまとめられています。「私の兄弟たちよ、キリストを説教しなさい。いつでも絶えずキリストを説きなさい。キリストこそ福音の全体である。キリストの人格、その努め、その御業は、我々の唯一の偉大にして全てを包括する主題でなければならない。」このような『説教史』から、過去の著名な説教者たちの説教の姿、それを知ることによって、また勇気づけられるでしょうし、大いに刺激を受けるでしょうし、私たちは現状で満足してはいけないということも教えられるかと思えます。パウロは監督若しくは牧師に対して、『教える能力』これは必要最低限のもので、絶対不可欠なものであるということを、敢えて強調するためにたった一つしか挙げなかったということです。今日の教会に、この『教える能力』を欠いた牧師が残念ながら多くいるということ、これは否めないことです。日本の教会が停滞しているのは、やはりそこにあると思います。私の通ったカルバリーチャペルでも”Teaching ministry”御言葉を教えること、これは教会の柱でありました。最も強調するものです。ですから、リバイバルを見たければ、教会成長を望みなければ、私たちはこの“教えるミニストリー”、これを強調しないわけにはいきません。ですから単に説教が長いだけの教会とか、説教ばかりしている教会というふうに誤解される節もありますけれども、でも『説教史』を見るならば、それはルターにしてもカルバンにしても、またウエスレーにしても、スポルジョンにして、そしてカルバリーチャペル、チャック・スミスにしても、これは例外無いということです。神に用いられて、そしてリバイバルをもたらすようなミニストリー、教会というのは、説教を重んじてきたということです。

で、テキストに戻って頂いて、今度は**3節**。『酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、』「“酒飲みでなく”当然でしょうと。教会のリーダーだったら、酒飲みだったら困ります」と。でも冒頭に申し上げた通り、これは牧師の資質だけを問うているんじゃなくて、教会だろうと、家庭だろうと、職場だろうと、リーダーになりたければ、酒飲みではいけないということです。後で見ますけれども、**8節**に執事が出てきますが、執事の場合は“大酒飲みでなく”とあります。ただの酒飲みじゃなくて、大

酒飲みでなく。監督には“大酒飲みでなく”という言葉は使われていません。執事の方は“大酒飲みでなく”と敢えて別の言葉が使われているんですが、監督は執事の勿論上に立つ者で、“酒飲みでなく”というのは『完全に酒を飲まない者』ということです。リーダーになりたければ、これは箴言の31章にも書いてあることですから、皆さんにも聞いて頂きたいと思います。箴言31:4~9。これは『<sup>1</sup>マサの王レムエルが母から受けた戒めのことば。』と1節にありますけれども、これはソロモンが母バテシェバから受けた戒めの言葉のことであります。で4節『<sup>4</sup>レムエルよ。酒を飲むことは王のすることではない。王のすることではない。「強い酒はどこだ」とは、君子の言うことではない。<sup>5</sup>酒を飲んで勅令を忘れ、すべて悩む者のさばきを曲げるといけないから。<sup>6</sup>強い酒は滅びようとしている者に与え、ぶどう酒は心の痛んでいる者に与えよ。<sup>7</sup>彼はそれを飲んで自分の貧しさを忘れ、自分の苦しみをもう思い出さないだろう。<sup>8</sup>あなたは口のきけない者のために、また、すべての不幸な人の訴えのために、口を開け。<sup>9</sup>口を開いて、正しくさばき、悩んでいる人や貧しい者の権利を守れ。』王たる者は酒を飲んではいけません。王というのは勿論リーダーのことです。牧師ならば酒を飲んではいけません。教会だけでなく、家庭において、霊的リーダーならば、父親ならば、夫ならば、酒を飲んではいけませんと言っているわけです。勿論聖書で「酒を飲むことは罪だ」とは言われていません。むしろ、酒に酔うことが、泥酔すること、酩酊することが罪だと言われてますけれども、ただ「リーダーならば酒を飲むな」と言ってるんです。飲む自由はありますけれども、リーダーになりたければ、酒を飲むなということです。「でも、テモテだってお酒を飲んだじゃないですか。」当時は水というものが浄水で飲めたわけではありません。いろんな菌があったので、ぶどう酒を混ぜて水割りワインというかたちで、これをテモテは胃薬として飲まざるを得なかったわけです。なるべく酒を飲まないということを心がけて、テモテはこの水割りワインを胃薬として飲むこともしていなかったの、ますます体調が崩れていったわけです。そこでパウロは敢えてテモテに対して、「あなたは水ばかり飲んでいないで、ぶどう酒を水で割って（1対3ですね。ぶどう酒1に対して水3です。何も美味しいものじゃないです。）それを胃薬として飲みなさい」と。そのようにパウロはテモテに勧めています。ですから何でもかんでも酒を飲んではいけませんと言っているんじゃないやありません。ラムレーズンのハーゲンダッツアイスクリーム、美味しいですね。それを私は食べますけれども、一切ぶどうの物を食べてはいけませんとか、ぶどう酒だとかアルコールが入ったものを食べてはいけませんとか、甘酒を飲んじゃいけないとか、そういう厳格な意味で言ってるんじゃないやなくて、むしろ酒を嗜む<sup>たしな</sup>よりもパウロはエペソ5章18節のところで「酒に酔ってはいけません。むしろ御霊に満たされなさい。」と言ってます。御霊に満たされたければ、リーダーとして絶対不可欠なことです。酒を飲んでる場合じゃないと。逆に言えば、酒を飲んでいる時は絶対に御霊に満たされることはないからです。試してみてください。お酒を飲みながら御霊に満たされるかどうか。まず無いことです。「御霊に満たされたければ、酒を飲むな。」と言っているわけです。別に御霊に満たされたくないと思うならば、いくらでも飲んで頂いて構いませんが、但し酔ってはいけません。難しいですね。私たちは弱いので、酔わないように飲むというのは相当の技術が必要です。酔わないように飲む酒は、もしかしたらあまり美味しくないかもしれません。意味が無いかもしれません。お酒というのは酔うために飲むからであります。ですからリーダーは酒飲みというよりも、御霊を飲むべきであります。御霊に満たされることを積極的に求めるべきです。

これまでずっと監督の、リーダーの資質として見て来た中でも消極的な項目もあれば、積極的な項目もあります。“非難されるところがない”これは消極的な項目です。“ひとりの妻の夫”、“自分を制する”、“慎み深い”、“品位がある”、“よくもてなす”、“教える能力がある”これらは勿論積極的な項目です。でも3節以降は“酒飲みでなく”消極的です。“暴力をふるわず”これも消極的です。で、一方で“温和で”これは積極的です。“争わず”これは消極的です。“金銭に無欲”これも消極的です。そのように敢えて積極的な項目もあれば、消極的な項目もありますけれども、それはパウロが意図して書いているわけです。“酒飲

みでない”消極的ですが、これを裏を返して積極的に言い直すならば、「御霊に満たされろ」ということです。“御霊に満たされる”ということを取って“酒飲みでなく”というふうに表示しているだけです。同じ事を言ってるんです。

で、“暴力をふるわず”これはもう説明は要らないと思います。牧師が暴力をふるうんだったら、もうその時点でアウトです。ましては家庭でDVだとか、家庭内暴力をふるう。牧師としては全く論外であります。パウロもかつては暴力をふるう者だったんです。でも復活のキリストに出会って変えられたんです。私も暴力をふるう者でした。目が合っただけで誰でも相手構わず暴力をふるっていたわけですが、でもそういう者でも変えられるわけです。でもそれが変えられずに相も変わらず暴力をふるい続けるならば、果たしてその人が牧師である以前に、本当に救われているかどうか怪しいということです。

で、次に“温和で”という言葉。これはピリピ4:5では同じ言葉が使われていて『寛容』と訳されています。(あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。)テトス3:2では『柔和』と訳されています。(また、だれをもそしらず、争わず、柔和で、すべての人に優しい態度を示す者とならせなさい。)原語は同じです。第一ペテロ2:18では『優しい』というところに使われています。(しもべたちよ。尊敬の心を込めて主人に服従しなさい。善良で優しい主人に対してだけでなく、横暴な主人に対しても従いなさい。)ですから“温和”という言葉は、『寛容』とも訳せますし、『柔和』とも訳せますし、『優しい』というふうにも訳せます。日本語で“温和”という言葉は国語辞典では『性格が落ち着いている。優しく穏やかである。』と言う意味で使われます。ほぼそれと同じ意味で使われているわけです。これも監督としては当たり前のことですし、クリスチャンとしても当たり前です。監督でなくても、クリスチャン全般において、一般的なクリスチャンにおいて当然のことです。酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で。教会の牧師でなくても、役員でなくても、すべてのクリスチャンならば誰もが持っているなければならないクオリティーというものであります。キャラクターというものであります。

で、今度はその次に“争わず”。“争う”という言葉は他にも“喧嘩好き”というふうにも訳せます。“喧嘩好き”、勿論これは「暴力をふるわず」と言われてますから、ここでの“争わず”は、暴力をふるう争いもありますけれども、「言葉で争う」論争好きと言っても良いかもしれません。そういう人は牧師としてふさわしくありません。温和である人がどうして喧嘩好きでありえましょうか。酒飲みならば、暴力もふるうかもしれません。でも酒飲みでなければ、暴力もふるわず、暴力をふるわないならば、当然温和で、温和であるならば、当然争わない。特に言葉においてです。

で、“金銭に無欲で”これも特別説明は不要かと思いますが、直訳は『金銭を愛さない』ということです。金銭を愛することをしない。第2テモテ3:2『終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。』とパウロが言いました。で、その困難な時代に現れる人々として、『そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、』と続きます。金を愛する者。ここに同じ言葉が使われています。世の終わりに自分を愛する者が沢山出て来ます。金を愛する者もウジャウジャ現れてきます。昔からそういう人たちはいました。でも世の終わりになると特にそういう人たちが増えてくると。ですから、牧師が金を愛する者であってははいけません。教会を強盗の巣にしてはいけません。牧師という肩書を使って、結婚式場やホテルで結婚式のアルバイトをして荒稼ぎをしてはいけません。また教会を英会話の学校にしたり、カルチャースクールにしたり、そこで荒稼ぎをしてはいけません。気を付けなければいけません。勿論私たちは教会運営をするためにはお金が必要です。でも残念ながらこれまでの歴史を振り返って見ますと、明治からプロテスタントの宣教師たちが入って来て、そして彼らはまず英語を教えました。学校で教えました。幼稚園も開きました。でもどうでしょうか。長続きしたでしょうか。結局それらのすべては世俗的なものになってしまいました。ミッション系の学校、幼稚園もそうです。聞いた話では、あるキリスト教系の幼稚園では園長の牧師もイエス・キリストの復活を信じていないということです。で、幼稚園の先生た

ちも皆ノンクリスチャンで、ピアノを弾いて園児たちに賛美歌を教え、お祈りを教え、聖書の物語を読んで聞かせる。ノンクリスチャンの先生たちがです。ミッションスクールはどうなったでしょうか。青山学院はどうなったでしょうか。同志社はどうなったでしょうか。明治学院はどうなったでしょうか。上智はどうなったでしょうか。考えさせられます。関西学院とか、関東学院とか、皆もとは、前身は神学を教えるところだったんです。牧師や宣教師を養成するところだったんです。教会で学校を始めたら、そうしちゃったんです。教会で幼稚園を始めたらそうってしまったんです。金銭に無欲でなければいけません。

で、次に 4 節、5 節を見て下さい。『**4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。**』**5—自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができらるでしょう—**』これは極めつけと言って良いと思います。一番分かりやすい牧師の証明と言って良いと思います。ミニストリーの基準となるもの。ミニストリーが神のものだとして承認されるものとして、一番分かりやすいものです。神学校を卒業したとか、牧師の免許を持っているとか、按手札を受けたとか、それらが批准にはならない。それらが承認として通用しないとっているわけです。それらを持っていたとしても、自分の家庭を治めていないならば、家庭が滅茶滅茶ならば、子どもたちが主と共に歩んでいないならば、不適格である。資格は無い者であるということです。牧師の家庭で、又は宣教師の家庭で、子供たちが神から離れ、教会から離れ、主からも離れてしまう。イエスと共に歩まないという悲しい現実が多く見受けられます。あつてはならないことです。私たちは子供たちによって本当に神に召されているかどうか、その働きが神の召しによるものかどうかを見極めることが出来ます。子どもがいなくても、夫婦の関係だとか、親子の関係を通してでもです。**第1テモテ 5:8**を見て頂きたいと思います。『**もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。**』優先順位というものがあります。当然、神が第一です。神を愛すること、これは心を尽くして成すことです。全身全霊をもってなすべきことです。神を愛すること、神を礼拝することです。ですから教会に神を礼拝するために集うということは、他のどんな活動よりも優先されるべきものだ。これはクリスチャンならば誰もが認識しているところであります。その次に来るのが、奉仕、宣教、ミニストリーではないんです。その次に来るのが家族なんです。家族を大事に出来ない者は、不信者より悪いと言っています。でも家族をトップに置いてはいけません。イエス・キリストの弟子ならば、父よりも、母よりも、夫よりも、妻よりも、子どもよりも、兄弟よりも、イエスを愛さなくてははいけませんから、これはクリスチャンならば迷うことはないと思いますけれども、ただ迷うところは神の働き、教会の仕事、ミニストリー。これが家族よりも優先してしまう。若しくは神よりも優先してしまう。そこが冒頭にも申し上げた仕事中毒になり得る非常に誘惑の多い領域であります。優先順位を履き違えてしまいやすい領域、これがミニストリーであります。勿論教会の中のミニストリーがすべて神のミニストリーと言っているのではありません。学校だろうと職場だろうと、何処でも神に仕え、神の栄光を現すことは出来ます。ミニストリーは何処にでもあります。宣教地はどこにでもあります。家庭だろうと、皆さんは宣教師としてそこに遣わされている。伝道者としてそこに置かれているということです。ですが、優先順位を常に私たちは意識して、これを常に履き違えないように吟味しなくてははいけません。ここで『情緒的に健康な教会を目指して(教会の成熟に不可欠なもの)』という副題のついているピーター・スキャザローという人が書いた本から皆さんに引用したいと思います。皆さんもワールド・ビジョンという団体をご存知だと思います。クリスチャンでなくても、ノンクリスチャンでもワールド・ビジョンの名前をほとんどの人は聞いていると思います。そのワールド・ビジョンを創立したのは、ボブ・ピアスというクリスチャンです。その人のことがこの本に書いてありますので、少し引用したいと思います。ちなみにこのピーター・スキャザローという人はかつて神よりも牧会を優先してしまったので、ある時奥さんは「もう私は教会に行きません。」と。ショックですね。私の妻が「もう教会に行きません。」と言ったら、もう私は牧師を辞めます。「もう、あ

なたとはこれ以上やっていけません。あなたのことを愛しているけど、私はもう教会には行きません。」とこのピーター・スキヤザローの奥さんはある時、そう言い放ったそうです。で、その時にカウンセラーのところを夫婦で訪れて、そして彼らは問題点を洗いざらい探られて、そして悔い改めることが出来て、そしてその失敗談も踏まえて、この本を書いたわけです。ピーター・スキヤザローは、どんな教会の働きも、教会や働きに携わるリーダーの情緒的・霊的な健全性にかかっていると云います。で、そのことを踏まえてボブ・ピアスの話を今から皆さんにお証します。「1950年ボブ・ピアスが結成したワールド・ビジョンはクリスチャンの救援・開発組織として世界最大となった。現在ではこの団体は93カ国において年間5億人以上もの人々に奉仕している。イエスへの情熱を持ち、飢餓や病のない世界を願ってボブ・ピアスは朝鮮戦争で孤児となった子供たちを助けるために働きを始め、人数においても規模においても拡大していった。だれも止めるほどの出来ないほどのビジョンと情熱によって彼は不可能なことを夢見、そして想像できる限りの様々なことを実現させた。本や雑誌は彼について書き立てた。友人たちは彼をこのように評した。『彼は休むことなく魂を獲得するために働く。私は彼のような同情心を持った人を見たことがない。彼は世界中の小さな人々の必要のために自分の命を文字通りささげた真の良きサマリア人である。』ボブはよくこのように祈った。“神の心を悲しませるものによって私の心を悲しませて下さい。”そのような情熱が彼を世界の果まで駆り立てた。どんな必要でも目にすれば、それにはことごとく応えるという尽きることのない熱意を彼は持っていた。残念ながら彼の生き方は家族に大変な苦痛をもたらしていた。友人たちはこう述べている。『ボブの妻ロレインは、夫が仕えた人たちが被っていたものとは違う種類の被害を被っていた。明らかに彼は自分の家族を全く放棄していた。妻や子供たちよりも働きを拡張し、さらに大きな影響を与えることを常に優先させていた。例えば娘はある時、自殺未遂をし、海外出張の父親に電話をして、すぐに帰国するように懇願した。「私はただお父さんの腕の中に抱かれたかっただけなの」と後で彼女は説明した。極東にとどまり続ける理由は何もなく、次の便で帰国する事も出来た。妻もすぐに帰るように願った。しかし、彼は近くにいる人々の必要に応える方に緊急性を感じ、ベトナムに行く便の手続きをしたのだ。「父が帰って来ないことは分かっていました。」と後に娘は言った。そして数年後、彼女は自らの命を絶った。妻との関係も少しずつ崩れていった。何年も二人が互いに口を利かないこともあったし、他の二人の子供たちとの関係も同じようにこじれていった。そして晩年64歳の時には、自分の家族皆から孤立していた。一日18時間の勤務、不衛生な食事。時差ボケが絶え間なく何年も続き、次第にピアス氏の情緒のタンクは底を尽き、肉体的にも非常に弱くなった。ある伝記作家が次のように書いている。「彼が生涯コントロールしようとしていた激しい気質が、最終的には大手を振るうようになり、以前コンピューターのように正確に機能していた頭脳も次第に短絡するようになっていった。そしてそれによって彼の言動は不安定になっていった。」ピアス氏が抱いていた“神のために燃え尽きさせて下さい。”という願いが悲運にもその通り成就されてしまった。ワールド・ビジョンの理事会との関係も緊張状態の中で残念な結末を迎えることになった。1963年、ワールド・ビジョンの理事会は初めてピアス氏の決定を覆した。経済的な理由をつけて、毎週放送されていた彼のラジオ番組を中止することにしたのだ。その年の後半に、理事会は健康を理由に彼を休ませた。彼はいつものように海外にいたが、静養のためにと云って家族から離れて、そこにとどまることにしたのだった。彼は次第に健康を回復していったが、ワールド・ビジョンとの関係は改善されなかった。1967年、理事会においてボブ・ピアス氏は解任された。法的な手続きのための同意書が次の日に出され、彼はそれにサインした。そして彼は1978年、白血病のために死んだ。数週間後、彼の娘マリリ・ピアス・ダンカーは、“ビジョンの男性、祈りの女性”というタイトルの本を書き始めた。そこには海外で起こった奇跡や彼らの痛々しい家族生活の闇の側面が正直に綴られていた。このような人間関係のもつれや、和解の話は類まれな賜物を持つ人々に限られているのだろうか。残念ながらそうではない。自分の教会の何十人もの人々も、また国中の何千人もの人々も同じような話を語ることが出来ると

思う。そしてあなたも同じではないだろうか。』というちょっと長い引用でしたけれども、皆さんも良く知っているワールド・ビジョンの創立者ボブ・ピアスです。またサマリタン・パースも彼は創立したんですけども、サマリタン・パースはボブ・ピアスの亡き後、フランクリン・グラハムが、ビリー・グラハムの息子が後を継いで健全に運営されているところでもあります。偉大な神の器も、ついにミニストリーというものを偶像視して、偶像化して、家族よりもミニストリーを優先して、彼は大切なものを失ってしまったわけです。自分自身をも失ってしまったわけでもあります。私たちもそれぞれこれを他人事に思わずに、自分にも当てはめて頂きたいと思います。あなたはしっかりと夫婦の時間を持っているでしょうか。子供たちとはしっかり向き合って会話をしているでしょうか。もしかしたら、それを避けて、教会の奉仕に躍起になって、埋め合わせをしようとして、誤魔化そうとしてはいないでしょうか。「夫と話していても面白くないし、話が合わないし、衝突が絶えない。だったら私は夫なんかとは話もしないで、ただ教会の奉仕に、または教会のプログラムや集会に入り浸りになる。」一般のクリスチャンにもこういう誘惑は常にあるということです。詩篇 127 : 1~5。これをすべてのクリスチャン家庭に贈りたいと思います。『**1** 主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなし。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなし。**2** あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなし。主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。**3** 見よ。子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。**4** 若い時の子らはまさに勇士の手にある矢のようだ。**5** 幸いなことよ。矢筒をその矢で満たしている人は、彼らは、門で敵と語る時にも、恥を見ることがない。』特に後半の**4節5節**のところで、子供たちが“矢”にたとえられています。敵の攻撃が来た時、子供たちがあなたと共に立って、あなたを助けてくれるんです。援護射撃をしてくれるんです。子供たちがあなたと共に立って、あなたをバックアップしてくれるんです。あなたが本当に苦しい時、辛い時、子どもがあなたのために祈ってくれるんです。これが本来のクリスチャンホームのあるべき姿で、これがクリスチャンの家庭を持つ者の最高のミニストリーであります。あなたの家に子供たちがいるならば、孫がいるならば、あなたは「私のミニストリーは何ですか。」ともう問う必要はありません。あなたのミニストリーはあなたの家庭にあります。子育てにあります。孫を育てることにあります。夫婦の関係にあります。親子の関係にあります。イエスも独身でありましたが、**マタイ 12 : 46~50** のところで、こう述べています。『**46** イエスがまだ群衆に話しておられるときに、イエスの母と兄弟たちが、イエスに何か話そうとして、外に立っていた。**47** すると、だれかが言った。「ご覧なさい。あなたのお母さんと兄弟たちが、あなたに話そうとして外に立っています。」**48** しかし、イエスはそう言っている人に答えて言われた。「わたしの母とはだれですか。また、わたしの兄弟たちとはだれですか。」**49** それから、イエスは手を弟子たちのほうに差し伸べて言われた。「見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。**50** 天におられるわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。』イエスはわたしの弟子たちこそがわたしの家族であると。あなたの子供たちこそがあなたの弟子であるということでもあります。私にとってMGFのメンバーは私の子供たち、私の弟子たちであります。教会はリーダーのようになるんです。そして家もあなたのようになるんです。子供たちはあなたの弟子たちであります。子供たちが、孫たちが、イエスと共に歩んでいるならば、それ以上の喜びは他に無いということを楽しんで欲しいと思います。特にこれを牧者と呼ばれる人たちに言いたいと思います。なぜならば多くの牧師の家庭では、夫婦関係も、親子関係も、実に疎遠なもの。そして中には崩壊しきっているものもあります。子供たちが従順ではない。子供たちが喜んで教会生活を送っていない。夫婦の関係も決して親密とは言えない。いくら教会で成功しても、ミニストリーで成功しても、あなたの子どもが主と共に歩んでいないならば、その成功は何の意味もありません。何の価値もありません。ミニストリーは家庭で始まると聖書は教えております。ミニストリーを教会に求める前に、ミニストリーは既にあなたの家庭にあるということを知って下さい。ミニストリーの成功の鍵は、家庭にあるあなたの教会です。



ミニ・チャーチ、それがあなたの家庭です。あなたの子供たちがあなたの弟子なんです。ですから子供たちによって、本当にその人が監督として、牧師として、教会のリーダーとして召されているのか、一発で分かります。牧師の家庭を見る時に、是非子どもを見て下さい。子どもを見れば一発で分かります。その人が神に召された牧師かどうか、すぐに判断つきます。別にその人の身辺調査をしなくても。学歴だとか、経歴を知らなくても。子どもを見ればすぐに分かります。『自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人』その人は監督としてふさわしい者です。“十分な威厳をもって従わせている”というこのフレーズは、子供たちから尊敬を受けているということです。もしあなたの子供が、「世の中で一番尊敬している人は誰ですか。」と問われた時に、「私のお父さんです。」と答えられないならば、あなたは失格者だと言っているんです。「お父さん以上に尊敬できる人はこの世にはいません。」と、そう言われるのが当たり前なんです。クリスチャンの家庭ではそれが普通なんです。お父さんよりも尊敬する人が他にあってはいけません。勿論牧師を尊敬するとか、過去の偉大なクリスチャンたちを、スポルジョンを尊敬するとか、それは意味としては分かりますけれども。でも自分の父親以上に尊敬する人がこの世に現存する人の中にあってはならないということです。厳しいようではありますが、これが出来なければ、教会なんか持っても意味がないということです。却ってつまづきになるということです。自分自身の家庭を治めることを知らない人が、それが出来ない人が、どうして神の教会の世話をすることが出来るでしょう。出来るはずがないということです。出来ない人がやってしまう。悲しい現実があります。その結果沢山の人がつまづいています。分裂分派は絶えません。教会の中では常に秩序がなく、まとまりがなく、そして長続きもせず、衰退の一途をたどり、いつかは教会は閉鎖してしまいます。若しくは教会があらぬ方向に行き、聖書から外れ、神から離れ、そして世俗化し、もはやこの世の団体と何ら変わらないものに成り下がってしまいます。

で、6節。『また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。』“信者になったばかりの人”その人がたとえ社会的に地位のある人でも、たとえ目覚ましい経歴の持ち主であろうと。「この人は有名な会社の社長なんです。この人は何処其処の大学の教授なんです。この人はこんな高い学歴があります。こんな素晴らしい資格があります。」でも信者になったばかりの人であっては、この人は監督としては、リーダーとしては、ふさわしくないんです。なぜならば、その人は高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることになってしまうかもしれないから。悪魔というのは、勿論ルシファーです。元天使長、御使いの頭、天のワーシップ・リーダーだったその人物です。彼は高慢になって、プライドから地に落とされたわけです。信者になったばかりの人は、私には出来ると思ってしまいます。「牧師ぐらい、そんなの簡単だ。教会の役員なんか。そのぐらい大丈夫。私は会社で何年も役員をしてきたから。聖書を教える、そんなの簡単です。私は教員免許もあって、何年も教えてきたんです。」本物の牧師は、自信なんか全くありません。むしろ自分には出来ないと思っているんです。とてもこんな務めは果たせないと思っています。自分は監督だとか、牧師には全く値しない。無価値な者だと思っています。それがしもべというものです。第1コリント1章・2章。そこにはパウロが、“弱さ”・“恐れ”・“おののき”という言葉を使って、本当に神に召されている神のしもべならば、高慢にならずに、常に弱さを覚え、恐れを感じ、おののきつつへりくだって、私の中から何か良いものが出るとするならば、それはすべて神の恵みですと。私の内には善は住んでいないし、私から何か良いものが出るとするならば、それは私が絞り出したものではなく、私が作り上げたものではなく、これは私の内に居られる主イエスキリストが私を通してなされた御業に過ぎず、私は何の栄光も受けるに値しない者ですと。モーセだって、「私は口下手です。」エレミヤだって、「私はまだ若いです。」と躊躇したくらいです。「私には出来ます。」そういう人はふさわしくないわけです。

で、7節。『また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに

陥らないためです。』また、もう一度ここで“悪魔”という言葉が使われています。常に神の働き人は、悪魔の誘惑、悪魔の攻撃・圧力にさらされております。悪魔は自分と同じ方へ神の働き人を引き込んで、そして一蓮托生（事の善悪にかかわらず仲間として行動や運命をともにすること。）にして、自分と同じさばきに遭うように。教師は格別厳しいさばきを受けますから、まずは教会のリーダーを落とせば、その後それに追従する者も皆共倒れになると。そのことをよく知ってますから、常に攻撃対象となります。『**教会外の人々にも評判の良い人**』というのは、一切悪評を言われない人という意味ではありません。『**非難されるところがない**』と同じ意味合いです。イエス・キリストでも、大酒飲みだとか、大食漢という悪い噂がたったわけです。でもそれはあくまで噂です。根も葉もない中傷です。でも悪い評判はたてられたわけです。誤解から、偏見から。パウロもそうですね。パウロも悪い噂をたてられたわけです。教会外の人からも常に悪い噂をたてられていたわけです。「あれはナザレの一派だ。」とか、「世界を惑わしている。」とか。イエス・キリストも「ベルゼブルだ。悪魔だ。」とか言われたわけです。そういう意味で何においても悪く言われてはいけないということをここで問うているのではなくて、明らかに、例えば「この人は牧師ですけども、教会の外ではパチンコに明け暮れてます。」とか、または「この人は消費者ローンで借金まみれで、クレジットで借金して、借金を返せないでいます。」とか、「あちこちでこの牧師は借金をしてまわっています。」とか。それはもうリーダーとして不適格ということなのです。

で、**8節**。執事という言葉が出て来ます。この“執事”というのは『ディアコノス』という言葉が使われていて、『ディアコノス』というのは“食卓で給仕する者”のことを指す言葉です。この『ディアコノス』から『ディアコニア』という言葉が派生して、それは“奴隷の仕事”ということなのです。ホコリまみれになって、塵まみれになって働く人、働く仕事。それが『ディアコノス』、それが『ディアコニア』という言葉です。特に教会の実務を扱うのがこの執事という立場です。ですから本来執事というと何かどこかお金持ちの屋敷から、玄関から出てくるような年寄りの気品のあるそういう人をイメージするかもしれませんが、この執事というのは、ただのしもべです。“ウェイター”と言ったほうが良いかもしれません。教会では、役員とか、そのような役割も執事の役割として今日扱われますけれども、この執事は勿論選挙で選出されるものではありません。『**執事もまたこういう人でなければなりません。謹厳で、二枚舌を使わず、**』謹厳。これは尊敬を受けるに値する人ということなのです。真面目な人ということなのです。そして二枚舌を使わない。これは分かりやすいと思いますが、監督と教会員の間立つのがこの執事ですから、それぞれ監督に対して、牧師に対しての言葉遣い。そして教会員に対しての言葉遣い。二枚舌を使ってはいけない。二枚舌を使いやすい、そういう誘惑を受けやすい立場であるということなのです。教会員の文句を牧師に言ってみては、今度は牧師の文句を教会員に言ってみると。そのようなゴシップをしてはいけないということなのです。役員はそのような者であってはいけないということなのです。で、『**大酒飲みでなく**』これは監督でも“酒飲みでない”ということが問われていましたけれども、執事は『**大酒飲みでなく**』。そして、その次に『**不正な利をむさばらず**』当然これは執事は実務を扱って会計も取り扱うわけです。初代教会の執事たちは、各教会から集められたきよきん醸金・義援金・寄付金というものを取り扱って、それをまた食料を買い付けて、その食料を食卓で配るような、そういう実務をしたわけですから、お金にクリーンな人でなければいけない。献金を取り扱うという人ですから、お金に常にクリーンな人ということが問われます。

で、**9節**には『**きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人です。**』これもクリスチャンとして当然と言えば当然のことです。当たり前のことです。ただとかく兎角執事というのは実務を扱うと言いましたから、この実務をやることで、つつい霊的な事柄がおろそ疎かになってしまうことがあります。「この人は会計士だから。だから執事にふさわしい。」とか、「この人はこの世でこういう経歴がある、学歴がある。だからこの人は実務で教会で役に立つはずだ。」と。でも大事なものは霊性であります。スピリチュアルなその霊性の部分。これが執事には大事であると。『**きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人**』でなければ、いくら

有能な実務者でも、有能な会計士でも、教会ではふさわしくないということです。

で、10節では『まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事の職につかせなさい。』あわててはいけません。慎重になって審査を受ける必要があります。これは勿論監督もそうです。やたらめったら短絡的に按手を施して、按手札を与えて、牧師にするというのは、これは致命的な失敗に繋がりますので、とにかく慎重に『審査を受けさせなさい。』格別厳しいさばきを受けることにもなりかねませんから、審査は大事です。

で、11節に『婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。』この“婦人執事”というところには\*印が付いていて欄外には別訳として『執事の妻』とあります。ちなみに“執事”という言葉が11節には使われていません。原語には無いです。ただの“婦人”です。女という言葉です。“グネ”(gune)という言葉がギリシャ語で、“グネ”は文脈によっては、ただの『女』でもありますし、『妻』とも訳せます。文脈では執事のことが言われています。12節には“執事”という言葉が再び出てきますので、それからして、これは『執事の妻』と訳したほうが良いのではないか、適訳ではないかという考えもあります。その一方で、執事の妻だけじゃなくて、『婦人執事』という存在も教会には見受けられるということで、例えばローマ16章のところには、沢山の婦人のリーダーたちが名前を連ねています。ケンクレヤのフィベという人が筆頭に挙げられています。そのように婦人の執事、実務を行なう婦人のリーダー、これも教会の中には必要不可欠であります。どちらでも良いと思います。ただあくまで教会のリーダーは、男性であって、女性は補佐的な立場にあるということを、それを第1テモテ2章でも学んできたところでもあります。『威厳があり』男の執事も『謹厳で』です。そして『婦人執事も、威厳があり』と。『悪口を言わず』。“悪口”というのはギリシャ語で“ディアボロス”(diabolos)という言葉が使われています。“ディアボロス”は、“悪魔”という言葉の原語でもあります。既に6節・7節で“悪魔”という言葉を見ましたが、その原語は“ディアボロス”です。11節の『悪口を言う』という言葉も“ディアボロス”です。同じ言葉です。“悪口を言う。”“ゴシップをする。”“噂話をする。”これは全て悪魔的行為だということです。特にこれは女性において誘惑となることです。女性はすぐに悪口を言います。口が軽いわけです。そして噂話が大好きであります。ゴシップが大好きですね。男性の執事も二枚舌を禁じられていますけれども、女性の執事も悪口を言うことが禁じられています。で、他は特別説明が要らないと思います。自分を制するとか、すべてに忠実な人でなければいけない。“忠実さ”というのは常に神のしもべとしては大切なクオリティーです。イエスも最後には「よくやった。良い忠実なしもべだ」と。忠実さ。特に女性に求められていることにも注目して頂きたいと思います。言い逆らわないということです。忠実さということはそういうことです。たとえ、リーダーが間違っているでも。従うのが忠実さです。神がその間違ったことを言ったリーダーを正して下さる。それを信じて、リーダーが間違っているでも従う。それが忠実さというものであります。勿論信仰に抵触するということになったら話は別です。あまりにもこれは非聖書的なことで、例えば牧師が女性に対して「あなたはしもべだから、私の性欲を満たすために、私の<sup>めかけ</sup>妾になれ。」とか、または「あなたは私のしもべだから、私に酒代とかパチンコ代を出すために、外で体を売ってこい。」とか、「消費者ローンでローンをしてこい。」とか、そんなことをリーダーが命じたら、もう論外ですけども、極端な例を言ってますが。でもこれは実は極端な例ではなくて、カルト化した教会で実際に牧師が信者に対して強制することでもあります。でもそんなことを言われたら、忠実であるなんてことは勿論、これは論外ですから、極端な例を挙げましたけれども、大体皆さんも常識で判断出来ると思います。聖書に抵触しない限り、あなたの中では「それは違うんじゃないかな。」と思っても、それでも従うべきなんですね。それが忠実なしもべであるということです。忠実な羊であるということです。これは夫に対しても同じことが言えると思います。

で、12節にも『執事は、ひとりの妻の夫であって』監督と同じことです。『子どもと家庭をよく治める

人でなければなりません。』監督だろうと執事だろうとほとんど同じクオリティーを求められています。これはすべてのクリスチャンに同じクオリティーが求められていると言って良いと思います。「彼らは特別だ。私はただの一般的なクリスチャンだから。私はただの平信徒だから、これは私には該当しない。」なんて思わないで下さい。監督だろうと、執事だろうと、ただのクリスチャン、ただの平信徒と自称する人であろうと、皆同じクオリティーを最低限のこととして求められていること。これも忘れてはなりません。

で、13 節には『**執事の務めをりっぱに果たした人は、良い地歩を占め**（若しくは良い地位を占め）、**また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信**（若しくは大胆さ）を持つことができるからです。』と。実際に初代教会の執事たち、7 人いました。使徒の働き 6 章以降に出て来ます。その中でステパノという人は皆さんも名前をよく知っていると思います。彼も執事で食卓に仕える者だったんです。でも彼はいつしか説教者となり、そして大胆に福音を語って、最期は殉教を遂げました。

もう一人 7 人の内の一人、ピリポという人がいます。使徒ピリポじゃなくて、伝道者ピリポとなって、彼もまた大胆に福音を宣べ伝えるようになります。ですから、ここで『**執事の務めをりっぱに果たした人は、**』ステパノだとかピリポを見ても分かる通り、彼らは**良い地歩を占め**、良い地位を占め、教会の実務から、小さなことに忠実なことから、彼らはもっと大きなことを任されて、そして彼らは伝道者となり、殉教者となっていくということです。ステパノに至っては、サウロの改心に大きな影響をもたらしました。ピリポはエチオピアの宦官にも福音を宣べ伝えて、エチオピアにもキリスト教が伝わったわけです。非常に大きな役割を果たしています。大胆になれる。信仰の確信を、強い確信を持つことができる。執事の仕事は素晴らしい仕事です。

で、14 節で『**14 私は、近いうちにあなたのところに行きたいと思いながらも、この手紙を書いています。**<sup>15</sup> **それは、たとえ私がおそくなった場合でも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。』**“神の家”というものと“自分の家”というのが比較されています。5 節にも“自分自身の家庭”という言葉が使われていますが、この“家庭”は『家』という言葉です。“神の家”の『家』と同じ言葉が使われています。“神の家”と“自分の家”。これは同じものです。自分の家を治める者は、神の家を治めます。自分の家を治めない者は、神の家を治めません。治めることが出来ません。“神の家”とは“神の家庭”です。神の家族です。教会は神の家族の集まりです。信仰の家族の集まりです。だから私たちは教会を大事にするんです。教会は他の職場と同じものではない。比べられるものではない。教会に集うこと、それは他の用事とは比較にならないということです。家と会社、どっちが大事なのか。考えて頂きたいと思います。ありとあらゆる活動、私たちは吟味しなくてははいけません。神の家に私たちがこうして集まっているのは、神に会いに来ているんです。牧師の家じゃないんです。ここは“神の家”なんです。神の家族の家長は神です。教会の頭は主イエス・キリストであります。ですから私たちは、神様に会いに教会に来ている。イエス・キリストに会いに教会に来ているんです。それよりも大事な仕事が、用事が他にあるのでしょうか。よく考えてみて下さい。これを後回しにしていい理由は他には無いはずであります。最優先事項、それを常に私たちは考えなくてははいけません。ただミニストリーということになりますと、話は別であります。私たちは神を礼拝し、神を拝するという、愛するという。これについては妥協はしませんけれども、でも礼拝もせずただ教会で必要があるからそのために奉仕をする。教会に来ているのは、ただ奉仕をするため。だから疲れる。だから重苦しい。そういう人たちが少なからずあると思います。でも本来教会に行くということは、神様に会いに来ることですから、これ以上楽しいことはない、これ以上素晴らしいことは無いはずであります。ですから、教会に来るにあたって何か重苦しさを感じたり、何か引っかかるようなものを感じているならば、あなたは何のために教会に来ているのか、もう一度聖霊に心を探って頂く必要があらうかと思ひます。そして優先事項が間違っているんじゃないかと、そのことを問われていることを

知って頂きたいと思えます。

で、教会は『真理の柱また土台』とも言われていますが、その『真理の柱また土台』というのが16節に書かれていることです。『確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。』これが『真理の柱、真理の土台』まさに教会とはこういうものだということです。神の家族とはこういうものだ。クリスチャン共同体とはこういうものだということです。『**「キリストは肉において現れ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」**』これはパウロの時代に歌われていた賛美歌とも言われています。世界最古の賛美歌の一つと考えられています。“キリスト”というところに\*印が付いていて、欄外には（異本『神』）とあります。異なる本というのは、写本が異なるという意味ですが、ギリシャ語の写本は約300ありますけれども、その300の内たった8つだけがここを『キリスト』と言っているんです。若しくは『彼』と言っているんです。でも後の292は全部そこは『神』と言ってます。『**神は肉において現れ**』私たちはそれを抵抗なく受け取れます。『神が肉において現れ』それは、受肉、イエス・キリストが子なる神である、神の御子であるということを私たちは信じていますから、『神が肉において現れ』は何にも抵抗がありません。でも中には抵抗のある人がいるわけです。その抵抗のある人たちというのは、イエスを神と信じていない人たちは、「イエスはただの御使いです。」エホバの証人に言わせれば「イエス・キリストはミカエルです。ミカエルが肉において現れただけです。イエスは神じゃない」と。そういう人は『キリストは肉において現れ』の方を選ぶわけです。残念ながら新改訳聖書もそちらの方を選んでしまってます。これは新共同訳聖書にしても、口語訳聖書にしても日本語の公用聖書は皆同じですけれども、ただ英語の欽定訳聖書では『**神は肉において現れ**』というその292の写本、それらを公認本文若しくは標準本文と言います。それが最も伝統的であり、写本の数が多いということは最も信憑性の高い写本ということです。8つというのは年代が古いとされていますけれども、ただ“古い”というのは、メジャーなものから除外されてしまって、たまたま残ったというものであります。「年代が古いからこっちが原文に近い」と短絡的に考える人が多いですけれども、古い写本が必ずしも原文に近い、原典に近いとは限りません。むしろ写本の数が多いメジャーなものの方が、むしろ原典に近いというのが有力な考え方であります。三位一体の神が信じられない人たちは、写本を書き換えて、そして神を『キリスト』とか、神を『彼』として変えてしまうわけです。今その話をするわけにはいかないのですが、とりあえず皆さんは『**神は肉において現れ**』と言う方を採択して頂きたいと思えます。

後は大体同じなんですけれども、ここは6つのことが言われています。まず第一に、キリスト若しくは神は肉において現れ。ここからが真理であります。または敬虔の奥義というものです。今までのまとめ、総括です。監督だとか執事には様々なキャラクター、様々なクオリティー・資格・資質が求められていたけれども、それを全部総括した内容とも言えます。教会はこのためにあるというようなものであります。「敬虔の奥義とは何ですか。」敬虔なクリスチャンになりたい人には興味があるところだと思います。『奥義』という言葉はギリシャ語で“ムステリオン”(musterion)、英語の“ミステリー”の語原で『隠されていたものがある時にベールが上げられて明らかにされる』という言葉です。隠されていた真理が暴露されるというのが“ムステリオン”という言葉です。

で、6項目あって、まず第一に受肉です。一言で言えば。神が肉をとると。私たちは真理を知りたいと思えますが、真理は概念ではないんです。真理は哲学じゃないんです。真理は人格なんです。イエスは『**わたしが道であり、真理であり、いのちである。**』とおっしゃいました。真理を知りたければ、私たちは受肉した神イエスを知らなくてはなりません。それがまず第一番目です。

で、二番目は『**霊において義と宣言され**』これは特にイエスの受洗です。受肉に続き受洗。洗礼を受けたというところです。イエスがバプテスマのヨハネからヨルダン川で洗礼を受けた時、天から声がありました。『**これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。**』義と宣言されたわけです。そして、その後に聖

霊が鳩のようにイエスの上に下ったわけですが、その鳩はイエスがこれから聖霊の力を受けて、聖霊のバプテスマを受けて、公宣教、パブリック・ミニストリーに入っていくその承認でもあったわけです。承認行為であったわけです。

で、三番目が『御使いたちに見られ』これは、**マタイ 4:11** にもありますように、イエスはユダの荒野で悪魔から誘惑を受けたわけですが、その誘惑をすべて御言葉によって退け、勝利されて、その直後に御使いたちがイエスのもとに来て仕えたとあります。恐らく御使いたちはこの時初めて神を見たんだと思います。御使いは神の御そばで仕えておりますけれども、神は光です。あまりにも神々しいので、造られた存在、たとえ霊的な存在であるとはいえ、神をまともに直視出来ないわけです。でも神が肉をとって下さったので、御使いもこの時初めて神をその目で見たと、『御使いたちに見られ』というのはまさにイエスが肉をとって、そしてイエスが神の子として、晴れて承認されたその時です。

で、四番目は『諸国民の間に』これは別の訳では『外国人の間に』『異教徒の間に』と訳せる言葉です。『異邦人の間に宣べ伝えられ』イエスは**マタイ 8章**ではローマの100人隊長に、**マタイ 15章**ではカナン人の女に、福音を宣べ伝えています。これはイエスの公宣教です。ユダヤ人だけじゃなくて、異邦人にも福音を宣べ伝えている。

そして五番目。『世界中で信じられ』イエスは十字架刑にされた時、頭上の罪状書きに三ヶ国語で、当時の世界の言葉で書かれました。罪状書きと言ってもそこには罪状などというものは書かれていません。単純に『ユダヤ人の王、ナザレ人イエス』と書かれただけです。それがユダヤ人の言葉ヘブル語、そして世界の公用語であったギリシャ語、そしてローマ帝国の公用語であったラテン語。世界中の人たちが読める字で書いてあったわけです。で、イエスが息絶えた時、ローマの100人隊長は「この方はまことに神の子であった」と。世界中でイエスは信じられたわけです。

で、六番目。それが『栄光のうちに上げられた』ということです。これがクライマックスです。イエス・キリストは栄光のうちに天に上げられて、天において神の右の座につかれて、そしてそこで私たちのために日夜とりなしの祈りをされてます。**ヘブル 7:25** にも「イエスは私たちをとりなす」と書いてあります。弟子の筆頭のペテロはイエスのことを三回も知らないことを否定することを、イエスはあらかじめ預言されました。**ルカ 22:31,32** に書かれています。「サタンがあなたをふるいにかける」とイエスは警告なさったわけです。ペテロのプライドがイエスには分かっていました。「たとえすべての弟子がイエスを見捨てても、私だけは見捨てません。最後までついて行きます」と。でもそのプライドがサタンのふるいにかけるということ。誘惑に陥ってペテロが痛い失敗をするということをイエスはあらかじめ知っていました。だからイエスは祈ったんです。ペテロのために祈ったんです。『しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。』(**ルカ 22:32**) “立ち直ったら”。“もし立ち直ったら”とは書いてありません。「万が一にも立ち直ったら」とは書いてありません。「立ち直ることでもあるならば」とも書いてありません。ハッキリと『あなたは、立ち直ったら』もうこれは前提です。確実にペテロは立ち直るということをイエスは予見して、確信して、ペテロのために祈ったんです。「ペテロは間違いなく立ち直る。そして立ち直ったら兄弟たちを励ましてあげなさい。これがあなたのミニストリーだ」と。「あなたは失敗者となる。でもわたしはあなたを赦し、あなたを認め、そしてあなたを用いる」と。イエスの祈りですから100%応えられるのは当然です。よく私のところに、牧師ですから何か特別なパワーでもあるかと思って、「祈って下さい」とお願いしに来る方がいます。義人の祈りは働くと確かに力があるとヤコブ書に書いてありますけれども、でもよく牧師のところに「祈って下さい」とわざわざ牧師にお願いする人がいますけれども、私に祈ってもらってもあまり効果はないかもしれません。でも大牧者があなたのために祈って下さることを覚えるならば、あなたはもう何も思い煩う心配は無いと思います。恐れは無いと思います。イエス・キリストは私と違って、24

時間ずっと祈ってます。で、イエス・キリストの祈りは勿論神の御心に 100%かなったものですから、確実に応えられます。不眠不休でイエスはあなたのためにとりなしておられるんです。これを絶対に忘れないで下さい。誰かがあなたのために祈ってくれていると思いますが、少なくともイエス・キリストだけは他の誰もあなたのために祈ってくれていなくても、イエスだけはあなたのために祈っています。これほど力強い、心強いことは無いと思います。ですからあなたも諦めないで下さい。イエスはあなたのためにも、そしてあなたが祈っているその人のためにも祈り続けているんです。ギブアップしないで下さい。で、祈りが応えられた時には、「私たちの祈りが応えられた」というよりも、本来は“イエスの祈りが応えられた”ということです。で、たまたまというのは語弊があるかもしれませんが、私たちの祈りもイエスの祈りと同じだったということです。イエスの祈りが応えられた。これが真実です。で、私達もイエスの祈りと同じ祈りが出来たので、「私たちの祈りが応えられた」という体裁をとりますけれども、でも“私たちの祈りが”と言うよりも“イエスの祈りが応えられた”。それが本当のところであります。そのためにイエスは栄光のうちに上げられたんです。

また他にもイエスは栄光のうちに上げられてから、私達に助け主を送られました。“パラクレイトス”。そばにいて援助する者。イエスと同じ助けをする者。“キリストの御霊”とも聖霊は呼ばれています。栄光のうちに上げられるというのは、私達に助け主を与えるためです。聖霊が私達の内に住みます。内住の御霊となります。で、内側において聖霊は語って下さいます。で、聖霊はただ内に住むだけじゃなくて、上からも下ります。聖霊のバプテスマ、これもイエスが栄光のうちに上げられた結果もたらされる祝福です。『**聖霊があなたがたの上に臨まれる時、あなたがたは力を受けます。**』この力が私達に与えられます。イエスと同じ力が私達の内にも発揮されるんです。で、イエスが栄光のうちに上げられたということは、もう一つ。イエスがもう一度戻って来られるということです。天に上げられて私達のために、父の家に住まいを設けて下さっております。用意して下さっております。そして、もう一度戻って来られるとイエスは約束されました。ヨハネ 14 章に書いてあります。そして私達はイエスが戻って来られる時、地上から引き上げられて携挙されます。で、その際には私達の体もイエスと同じ体の一瞬にして変えられます。それを第 1 コリント 15 章では、やはり『**奥義**』と呼んでいます。体が一瞬にしてたちまちに変えられる。

これが真理です。イエスの受肉から始まって、イエスが栄光に上げられる。昇天、高举とも神学用語で言います。これが『**教会の真理の柱、真理の土台**』です。これが『**敬虔の奥義**』と呼ばれるものです。難しいことは特別書かれてはいません。これはクリスチャンとして基本教理です。基礎です。キリスト教の ABC です。クリスチャンならば誰もが知らなければいけないことです。でもこれをさらに一言でまとめるならば、受肉から始まり栄光のうちに上げられるまで、それは単純に私達がイエスと共に歩むということです。これが敬虔の奥義です。あなたは敬虔なクリスチャンになりたいですか。あなたは神に用いられたいですか。監督として、執事として、リーダーとして。教会の中でも外でも、家でも、職場でも、敬虔なクリスチャンとして神に用いられたいと思うならば、あなたはイエスと共に歩まなくてはなりません。受肉から始まって栄光のうちに上げられるまで、イエスの生涯をたどることがクリスチャン生活のすべてであります。本当は時間があれば、この受肉から始まって一つ一つ詳しく説明したいところですけども、皆さん良く知っていると思うので、敢えてそれはいたしません。また別のスタディーに、主題説教で、できたらそのようなスタディーを是非したいと思ってます。受肉が私達にとって何の意味があるのか。受洗が私達にとって何の意味があるのか。また『御使いたちに見られる』ということがどういうことか。『諸国民の間に宣べ伝えられる』『世界中で信じられる』『栄光のうちに上げられる』と簡単に説明しましたが、これをもっと深く掘り下げて、もっと詳しくこれをクリスチャン生活にも当てはめていく。それで私達はこれを実行していく。それがクリスチャン生活のすべて。それが教会生活のすべて。それが今まで監督だとか、執事だとかに求められていた資質のすべてであります。では、今日はこれで終わりたい

と思いますが、また**4章**。『しかし』という言葉が見られます。続きがまだありますので、是非次回も楽しみにお集まり頂きたいと思います。